

会 議 録

1 会議名

令和5年度第15回直江津区地域協議会

2 議題（公開・非公開の別）

【自主的審議事項】

・直江津まちづくり構想について（公開）

3 開催日時

令和6年3月3日（日）午後2時45分から午後3時35分

4 開催場所

上越市レインボーセンター 第三会議室

5 傍聴人の数

0人

6 非公開の理由

—

7 出席した者（傍聴人を除く）氏名（敬称略）

・委員： 青山恭造（会長）、田中美佳（副会長）、磯田一裕（副会長）、
久保田幸正、田中 実、田村雅春、中澤武志、増田和昭、水島正人
（欠席者7名）

・事務局： 北部まちづくりセンター：佐藤所長、近藤副所長、小川係長、丸山主任

8 発言の内容

【近藤副所長】

- ・会議の開会を宣言
- ・上越市地域自治区の設置に関する条例第8条第2項の規定により、委員の半数以上の出席を確認、会議の成立を報告

【青山会長】

- ・挨拶
- ・会議録の確認：田中実委員、田村委員に依頼

議題【自主的審議事項】直江津まちづくり構想について、直江津プライド2021の代表者である磯田副会長より、令和5年度地域独自の予算事業「直江津のグランドデザ

インを描く事業」についての中間報告をしていただく。

【磯田副会長】

直江津のグランドデザインを描く事業の中間報告ということで、今日お話をさせていただくのは、今年度、屋台会館と三八朝市の未来ということで、市民参加型のワークショップを合計4回やり、その後市民向けの発表会、意見交換会をさせていただいた内容を中間報告としてご説明し、3月末には提言書という形で地域協議会と上越市に提出する予定になっている。それに先立ち、皆さんに一度ご説明をさせていただき、その提言書を受けて地域協議会としてどうしていくか、或いは来期の協議会にどうバトンタッチしていくかということをお願いしたい。

では、簡単に説明させていただく。三八朝市の未来を考えるということで、三八朝市の様子である。これは5月ぐらいのにぎわっている頃の朝市。上の写真は、雰囲気からすると4年くらい前かと思う。5月の三八朝市祭りのあたりのときで一番人が多く出ている。一回120円で参加してくれている不定期の方もいらっしゃる。いつも出ていらっしゃる八百屋さんや、海鮮系のお店は2店舗しか出てないが、鮮魚は扱っていない。下の写真は金物屋さん、あとは八百さんが多い。三八朝市祭りを、三八協の人たちが一生懸命「市」を盛り上げるために、十数年やっているが、出店者の人たちにとっては、にぎやかになるのはいいが、自分たちの商売にはあまり結びついていかないと、太鼓をやめてほしいとか、タケノコ汁や豚汁は大勢人が来て逆に迷惑だといった話もあり、なかなか「市」全体で盛り上げていこうという機運になっていかないのが現状である。近くにはライオン像のある館があり、三八協で作った福永十三郎や安寿と厨子王の紙芝居をここでやったりしている。中澤委員から演者としてやっていただいたりしている。冬になるとトラックでお店を出すような人も増えてきている。ライオン像のある館の裏庭は、今はほとんど有効活用されていないのが現状である。その隣の民有地は、遊休地のようにになっているのが現状である。これは、直江津のまち歩きガイドマップを作らせてもらったときにリニューアルした、6、7年前のイラストマップである。このときに、各店舗の出店者の人たちに聞き取り調査をしている。この時点でこのぐらいの数だが、今はここから6割ぐらいになっている感じがする。もう自分たちの代で終わりという人たちがほとんどで、以前はコーヒーの出店も可能だったが、一時期駄目になり、飲食はなかなかハードルが高いこともあり、定着していかない状況である。高齢者のまちなかの台所として、野菜や、山菜なども少なくなってきていて、これからはその維持

すら危ういような状況である。

屋台会館の活用ということで、屋台会館は、和風の切妻屋根の折り重なった形に、真ん中のエントランスがアール状の入口で、中はメインのホールが吹き抜けの大きな空間になっている。うみまちアートのときにはメイン会場として使ったが、健康診断やイベントのときに使っているだけで、なかなか定期的に、或いは常設的に活用というところまでは至っていないのが現状である。下は手前のホール、それからエントランスの入口の状況である。左の上が大ホールに入る手前の部分、小さな部屋がいくつかあって、右の下は事務室のところである。反対側の部屋に、今は観光コンベンション協会が入っている。要は、有効活用していないのではないかと常に言われ、議論されてきている。市はサウンディング型市場調査などで民間活用の道を探しているとは言うが、それが実際に活用に結びついていないという現実がある。

今回のこの事業は、地域協議会での議論をより深め、市民とともに進める提案ということで、自主的審議事項の直江津まちづくり構想の深掘りと、市民参加によって直江津のランドデザインを描いていく、そして上越市の施策につなげていくということが目標である。なので、最後に、結果を地域協議会と上越市へ提言書として提出する。次年度以降も一つ一ついろいろな地域の課題について、市民参加型で提案を作っていくながら、行政に訴えていく、或いは市民で進められるものは進めていくというような取組をしていく、していこうということである。

参加のデザインというワークショップの手法で、市民が自ら考えて、どういうことをしていけばいいのかを計画していく。それを、今回テーマを深掘りしながら、一つ一つのワークショップでは、テーマを決めて、課題を知る、課題を考える、課題をデザインする、という一連の検討を4人から5人のチームに分かれて検討して計画案を作っていた。市民の方々に参加をしていただいたのは3回までで、4回目のワークショップは、この市民のワークショップの中に、最低一人の地域協議会委員の有志の方から入っていただいて議論をして、最後は地域協議会委員の皆さんと最終計画案というような形で提案をまとめている。このワークショップを最初に始めたときに、地域協議会の皆さんにもお声がけさせていただき、増田委員、田村委員、今川委員、田中美佳副会長、青山会長に参加いただき行ってきた。

どういふふうにランドデザインを描いていくかについては、ファーストステップとして4回のワークショップをやり、行政との意思疎通、そしてプロセスの共有、提言書

の作成、検討作成を最初のステップとしていきたいと思っている。セカンドステップとしては、協議会への働きかけと議論ということで、上越市と地域協議会に同じ提言書を出すわけだが、協議会の中で今までやってきた検討をまず理解していただくというのが本日の会である。目標としては、三八朝市の活性化と屋台会館の活用を、パブリックコメントの意見募集はもう終わっているが、一番近いのは通年観光プロジェクトなので、そこにどう盛り込んでもらうかということ提言していく形になる。そこでフォースステップでは、地域活性化の方向性に基づいた事業実施をしていく。これは直江津プライド2021として活動していく、或いはプレーヤーとしてやっていくということだが、地域協議会の全体計画、全体の意見の中での活動を、どう我々が実行できるかというところに我々の力点があるということである。

「三八朝市を誰がどうするワークショップ」ということで、また後で具体的話をするが、令和6年度、7年度、8年度と3年ぐらいの単位で、三八朝市をどうするか考えている。一つ目は、今の場所での活性化をまずは進める、現通りでの社会実験ということ。それから二つ目が、同時並行的に移転場所をこのワークショップで提案して、調整していくということである。後でまたワークショップの内容のお話をするが、今の場所の三八朝市には、やはり地域住民の人たちや沿道にお住まいの方々にとっては、非常に迷惑というか不利益をこうむっていると、長年の鬱積というか、仕方なくあの場所で行っているが、本当は別の場所に動かしてほしいという切実な悩みがある。そういったことを解決していかないと駄目だろうが、すぐにはできないので、まず三八朝市の今のところで活性化することを考える。そしてまた、同時並行的に、別の場所への移転を提案していくということが、令和6年度の事業である。令和7年度には移転先の絞り込みの検討や実現可能性、或いは事業計画の立案や行政との調整等をしていく。要は、今考えている現通りでの社会実験のようなことを、どれだけ令和7年度に反映できるかということになる。そして令和8年度になったときに移転先のハード整備や社会実験事業の練り上げ、事業者を増やしていくプログラムをどれだけ作れるかというようなことをしていきたいと思っている。

「屋台会館を誰がどうするか」についても、3年ぐらいのターンで検討をしていくということだが、市の観光プログラムの中では、令和6年度に社会実験をやると言っている。どういう社会実験をやるかはまだ見えていないが、屋台会館を活用してイベントをやってみたい、今はそんな雰囲気である。どの程度の社会実験なのか、委託として出て

くるのかはまだわからないが、ワークショップで出た案を社会実験で実施してもらい、協力しながら運営していく道をまずこの中で探っていく。そのときに市がこれから委託を出す仕様書の中身に、どれだけコミットできるかということが、直近の4月、5月あたりに山場のようなところがあり、そういうことをしていきたいと思っている。その社会実験の受託事業者として、地域の意見を反映させることができるのか。行政が地域の意見をあまり聞かずに社会実験の委託を出されても困るし、誰がどうなるかということの中で、地域との連携をしっかりと作ってほしいということを訴えていきたいと思っている。本当は、DMO的な組織に成長していける組織構築が望まれる。DMOというのは、Destination Management Organizationの略で、要は観光コンベンションでは担いきれない地域の観光プログラムや、小さな旅の企画づくり、地域の人たちとどういうふうに繋がりながら観光で地域を立てていくかといったことを考えていくような組織ということだが、そういうことをできる、或いはやっていく組織が、本当はこの社会実験の受託者になってほしいと思う。屋台の倉庫から観光施設への転換というのが、屋台会館が目指すべきところであるというのが6年度である。7年度は社会実験をやったり屋台の見学や祇園祭の発信などをやりながら、建物の改修整備プランくらいまではいかないと考えている。市の考えでは、社会実験をやって、こういうところが不便だ、使えないとかいうことも実験の一つの趣旨らしいので、いろいろなやり方をやって、ここをこのように直したらもうちょっと使い勝手がよくなる、或いはこういう社会実験を試してみる。例えば、夏にカニや横丁のようなことを季節営業のようにやってみて、ものすごく評判がよかったらそういうことに機能転換したり、或いは通年の中で、鮮魚センター的なことができるのかどうかということも検討していきながら、整備のプランを検討していく必要がある。行政がそのままそれをやっていくかもしれないが、そういう道筋で検討をしていきたいと思っている。令和8年度には通年本格活用、施設リニューアルに入っていくように動いてほしいと思っている。

第1回のワークショップは、4つの班に分かれてやってくれたが、若い世代のグループには、高校生が自主的に参加してくれ、全ワークショップに出てくれて、発表会では発表もしてくれた。市議も何人か来られたり、三八市沿道の町内会の方や三八協の会長さんも来てくださり、いろいろな方面からいろいろな意見を聞いてこの検討案を進め、発表では増田委員、田村委員から発表してもらったり、皆さんと議論をしてきた。

先般行った成果発表会、市民意見交換会の様子である。2日間行い、アンケートもと

ったが、まだ集計はできていない。意見交換では30人くらいの方から来ていただき、ご意見等をいただいた。それらも受けとめながら最終の提言書にしたいと思っている。

三八朝市の未来を考えるとということで、我々の最終案である。三八朝市は必要か。必要である。一つは近隣住民、特に高齢者の台所としての役割がある。今までの「市」の機能の温存というか、そのまま残していくべきものであるということである。二つ目は、直江津のまちの歴史、伝統文化の象徴である。百数年続いている直江津の朝市、この歴史と伝統、文化をつなげていきたいということ。市の通年観光計画の一番上には、目指すべき目標として「歴史と文化の伝承」と書いてある。であれば、やはり三八朝市を残していきながら、機能や活力をさらにつけていきながら、通年観光の一つの要素としてきちんと位置付けてほしいという思いがある。三つ目は、人と人との交流と生きがいである。商売で儲けたいがために出てきている人はほとんどおらず、市組合に参加している方々でも、「トントンだね」くらいの感覚だと思う。市の魅力というのは、対面での販売や人と人との交流の中で、自分の喜びのようなものを感じられるか、そこに金儲けではない喜びのようなものをどう担保できるかというのが市の検討の一つではある。

朝市は通年観光のコンテンツになり得るかは、1番、重要な観光の要素である。2番、今の市民の台所としての機能を残しつつ、観光のお客様にも喜んでもらえるような、或いは新しい客層の人たちにも喜んでもらえるような魅力を付加していく必要があるというのが、我々のワークショップで行った提案である。3番、場所はどこがいいかについては、当面と将来に分けているが、当面は三八朝市通りで共存共栄を図っていく。通りの人たちに不便を強いている、その不便を少しずつ解消しながら今できることを考えていく。そして将来は、いろいろな場所の案が出た。あすか通りにすればいいのではないかと、三八朝市と互の市を一緒にしてやればいいのではないかと、屋台会館のあたりにすればいいのではないかとかといった話があったが、会の提案としては、先ほどの「直江津のまちの歴史、伝統文化の象徴」という意味の中で、三八エリアにあることがやはり重要であるという結論に至った。そして、あのエリアの人たちの台所としての役割ということが強く言われていた。その中で、ライオン像のある館の裏庭と、隣の民有地を使ったエリアで、プラス船見公園のところで将来的に考えてはどうかということである。4番、既存継承か新たな魅力向上かについては、やはり両方必要だということで、ハイブリッド型を目指す。商品の魅力、食べられる市のようなものをどんどんやっていくということと、なかなか一人で出店というのは難しい。ハードルも高いし、出店者の方が調

整しなければいけないことが山ほどあり、それらをまとめていく中間組織のような、声掛け団体みたいなものが必要ではないか。既存の朝市、プラス新規の三八マルシェというものをまずはやってみてはどうかという提案である。百年続く三八朝市の事業継承と、通年観光と連携した新たな魅力創造を目指すということで、「市」としての三八朝市、プラス月一で行う三八マルシェのような形でやっていってはどうか。今も、パン祭り等イベント的なことを三八朝市のところでやっているが、ものすごく人が来る。そういうものを月一で三八マルシェとして、イベント的なものを三八朝市の場所でやるということがまず必要ではないかということである。あとはイラストマップを更新したり、出店者の似顔絵看板づくりみたいなこともやっていったらどうか。令和6年度の地域独自の予算の申請は終わっているので、6年度事業ではなかなか難しい。けれどもさきほどの通年観光の社会実験に、こういうものを取り入れてもらえれば、そしてその通年観光の中でも船見公園の社会実験を拡大して三八朝市やライオン像のある館のあたりなど、まち歩き観光ゾーンの社会実験として予算化してもらえれば、やれるのではないかと思っている。当面は今の場所で行うが、新たな月一のマルシェのようなことを社会実験的に行う。取組の主体団体としては、我々直江津プライド2021と有志の人たちを考えていて、来年度うまくすれば調整も含めて年3回ぐらいでやってみて、その後、月一ペースでやれるかもしれないと思っている。マルシェの方、団体の人たちと話をしていると、月一はできると言ってくれている。それを、市組合の人や観光課の人たちと、どう調整してどのようにこの中で動かしていくかということが直近の課題である。4月あたりにそういった調整をしながら、できれば5月あたりに1回やりたいと思っている。新たな場所がどこかは、我々の案ではライオン像のある館の裏庭、プラス空き地だが、やはり三八朝市としてのアイデンティティーを残したいのでその場所、或いは、屋根がどうしてもほしいということがあるので、そのあたりを、どのような施設系がいいのかを検討していく場所の深掘りと、どういう姿があり得るのかということを検討していくというのが、次のステップになる。

屋台会館は、市内で一番の集客力を誇るうみがたりのお客様をターゲットに、直江津に半日から1日滞在していただくための施設に生まれ変わらせようということである。そのための機能転換が必要である。現在は不定期のイベント会場として使用している。上越観光コンベンション協会の事務所である。今まで民活の道を探ってきたという中で、一番お客さんが来ているのだから、そこに観光インフォメーションセンターを置かない

のは、市の愚策である。そして、そこに13区の情報や地域の情報を、一元化して集約しながら発信していくことが必要で、春日山の麓にできる観光センターがどういうものなのか、どういう機能を持つものを作ろうとしているのか全然見えないが、春日山に作るよりもみがたりの前に作った方がよほど波及効果があるのではないか。鮮魚センターや物産館、食事どころ、直江津文化の伝承。屋台も全部を展示するのは難しいが、町内に屋台小屋があるところは戻してもらいながら、屋台の見学ルートを作ることができるくらいの屋台小屋等の改修と、直江津文化の伝承ということで、そういうことを伝えられるようなスペースが必要であること。それから、若い世代の人たちにとっては、憩いのインドアスペースがほしい。「アウトドアはいっぱい上越にはあるけれど、冬になると寒いし、ただ、だべっているだけで楽しい世代の人たちは、どこかそういうところがあってほしいんです」と、ワークショップで言われていた。そのようなものを将来的に目指していく、社会実験で5つの将来像を検証していこうということがある。社会実験の仕様書をどう作るのか、どんな人に担ってほしいのか、地域との連携で作るのか。先ほど三八と言ったのと同じことである。社会実験を受けてのリニューアルまたは増築という道筋を市は言っているが、今の姿は何があるのかすらわからない建物なので、うみがたりから出たお客様が次に向かいたくなる外観にリニューアルしてもらいたいという思いがある。将来機能を一体的にとらえる組織づくりという組織論の話になるが、直江津観光のランドオペレーターとして、いろいろな企画であったり、立案、マーケティング、広告宣伝、地元との連携、そういうことがトータルにできる直江津DMO組織が必要ではないか。それが、今回の社会実験の受託事業者がそのように成長していけばいいという話である。通年観光プロジェクトと連携しながら、組織づくりの道を探る必要があるのではないか。どんな社会実験が必要かという、どういう社会実験をやるかはまだ決まっていないが、観光インフォメーション、直江津だけではなく上越全体の情報発信や、土産物、例えば月一回板倉区フェアをやる、牧区フェアをやる等、そういう企画を作りながら、直江津から他の地域への紹介等をしていく。2番は鮮魚センタープラス物産館としての社会実験。通年化に向けた取組の可能性を見極めたり、地域の紹介のアイデアをたくさん出していきながら、どういうものがあればいいのか、お客様に喜ばれるのか。そして食事どころ、直江津文化の伝承、祭りや笛、太鼓の体験の中に、直江津はこういうまちだということ、少しはわかってもらえるような社会実験、取組が必要だと思う。憩いのインドアスペースとして、市民、住民の世代を超えた憩いの空間づく

りになっていくような、晴れていたら、海浜公園のほうにも繋がっていくような、楽しいスペースになってリニューアルされていくべきではないかと思っている。

最後のページは、提言書を受けて地域協議会はどう動くのかというところを、今日議論や意見交換をしていただきたいということと、それを受けて来年度の委員の人たちにどのように伝え、どのような行動に移してもらえるのかということ、検討していただければと思っている。

【青山会長】

ただいまの説明について意見、質問等はあるか。

【田中実委員】

今の提言書についていろいろ説明を受けたが、要は皆さんの会で何をやりたいのか。市へ提言と言ったり、自分でやってみたいと言ったり、最後のほうでは地域協議会への提言という話をしておられる。皆さんの会が直江津まちづくりのために、こういうことをやりたいという団体なのだと私は解釈していたのだが、理解に苦しんでいる。提案だけの団体なのか。

【磯田副会長】

何度か説明しているので、わからないと言われれば謝るしかないが、我々の団体は、問題、課題を解決する案を出して、それを行政にも提案し、そして自分たち自ら実行して市民に問うていく、或いは市民と協議しながら、こういう姿がいいのではないかと描いた事業を、我々が先導的にやっていくというような団体なので、提言も我々の仕事、それから自分たちでプレーヤーとしてやるのも我々の仕事とご理解いただければと思う。

【田中実委員】

それは私自身も十分わかっている。いつお話したかは忘れたが、我々地域協議会は、基本的には提言するだけということになっている。要は我々地域協議会委員を巻き込むということは、いいことなのか悪いことなのか知らないが、十分注意してもらいたい。

【磯田副会長】

判断するのは地域協議会、それから地域協議会に参加している皆様方がご自身で判断していただければと思うが、地域協議会で議論したことを、誰がどう実行していくのかということになったときに、地域独自の予算も含めて地域の団体と連携すると書いてある。地域の団体の一つとして直江津プライド2021があつて、逆に直江津プライド2021が、地域協議会の自主的審議事項を踏まえた活動をしている団体であるというよ

うにご理解いただければありがたい。

【田中美佳副会長】

私はワークショップになかなか参加することができなかったが、3回目に参加させていただき、その後のまとめにも一緒に入らせていただいて、今説明していただいたことを一緒に考えさせていただいた。地域協議会は実行部隊ではないので、自分たちが思っていることがなかなかできない、考えているのになかなか実践できないことが皆さんとても歯がゆいところだといつも思っていると思う。参加させていただいたときに今の説明があって、未来が見えるというか、私たちでもなにかやれることがあるということはとても楽しみなことだと思った。協議会委員だから参加したこともあり、その意見を聞きながらいろいろなところ、行政等に話していける部分もあるだろうし、なにかしら少しでも変わっていけるような、こういうことをしていけばいいということが希望になったし、参加させていただいてなにか私たちでもできるんだと思えた場だった。とても楽しく参加させていただき、最後の発表のときにも30人くらい来られたが、皆さんとても積極的に意見を言っておられ、若い人や、先ほど話にもあった高校生も話をしてくれたり、直江津のお菓子屋さんの奥さんから「若い人やご年配の人と、みんなで意見を言いながらよくしていきたい」という意見をいただいたり、他にもたくさんの意見があり、こういった場で触れあえてお話が聞けるのは、本当にいいことだったと思った。

【青山会長】

他に意見はあるか。

この件については次期委員に引き継ぎ、協議していくこととする。

【小川係長】

・次回協議会：3月19日（火）午後5時30分から

議題は、今期のまとめ、次期委員への引継事項を予定している。

【青山会長】

その他にあるか。

【増田委員】

次期委員への引継事項と言われたが、「改選まで整理事項」という資料があるが、おおまかにはこれでいいが、もう少し詳細にしないと次の人が何をどう進めていったらいいか全くわからないことになるので、三役を含めて案を作っていただいて諮ってもらいと非常に安心して引き継ぎができると思うがいかがか。

【小川係長】

資料案を作成し、相談させていただきたい。

【青山会長】

他にあるか。

【田村委員】

議論がされているのかわからないが、地域協議会委員の報酬についてである。私は正直なところ夜の会議はもう辛い。2時間とみて単純計算すると、1時間600円である。

【青山会長】

これは交通費なので、時間幾らというものではない。

【田村委員】

私が言っているのは、そういうものを次期は交通費とみないで、報酬とみたほうがいいのか。報酬で問題があればもう少し考えたほうが良いと、次期委員の将来のために言っている。

【青山会長】

直江津区地域協議会だけの問題ではない。

【佐藤所長】

先ほど会長も言われたように、自発的な議論をお願いしたいということで、交通費として1,200円を一律でお支払いしている。これが高いのか安いのか、報酬を出すのか、そのあたりについては、地域自治推進プロジェクトの中で今検討しているところである。ただ、令和6年度については、同じ状況で進み、その先どうなるのかは今後の検討の中身によると思う。

【青山会長】

他に意見を求めるがなし。

- ・会議の終了を宣言

9 問合せ先

総合政策部 地域政策課 北部まちづくりセンター

TEL : 025-531-1337

E-mail : hokubu-machi@city.joetsu.lg.jp

10 その他

別添の会議資料もあわせてご覧ください。